

教養に裏打ちされた「言語行動主体」を育てる

—ことばに対する「見方・考え方」を鍛えていく単元の開発—

福井県立若狭高等学校 教諭 渡邊久暢

1 問題の所在

「過去の延長線上に未来を思い描くことが不可能になった」とリンダ・グラットン(2011)が警告したとおり、情報の陳腐化はますます進み、AI(人工知能)に代表されるテクノロジーの進化、グローバル化の進展、人口構成の変化と長寿化等により、技術や産業の在り方、人の役割も急速に変化しようとしている。

このような変化の激しい時代において育むべき学力は何か。石井(2015)は、教科の学力・学習を「知識の獲得と定着」(知っている・できる)、「知識の意味理解と洗練」(わかる)、「知識の有意義な使用と創造」(使える)の3層へと構造化して提示した上で、「知識の有意義な使用と創造」=「使えるレベル」の学力育成の重要性を指摘した。

「使えるレベル」については、誤解されることも多いため急いで断っておくが、石井は流行の兆しを見せている「教科横断的な汎用的資質・能力」の教授が必要だと述べているわけではない。渡邊(2016)で述べたとおり「教科の本質に関わり、それゆえに領域を超えて発揮される能力となり得る、その教科の知識や技能をベースとした質の高い学力」、つまり「生きて働く質の高い学力」を各教科で育てていくことの重要性を指摘しているのだ。担当する生徒が高等学校卒業後、高等教育機関に進学するか、直接社会に出るかに関わらず、我々は全ての生徒に「生きて働く質の高い学力」を育まなければならない。

稿者は2016年4月に教員生活で初めて海洋科学科の生徒を担当した。若狭高校海洋科学科は、海洋探究コースと、海洋技術コース、海洋資源コースに分かれている。稿者が担当する3年3組は全員が海洋探究コースに所属し、現代文Bを2単位、古典Aを2単位履修する。進路希望は、漁師・船員・公務員、会社員として働きたい者、料理・美容・プログラミング等の専門学校に進みたい者、外国語学・看護学、海洋学、スポーツ保健学を大学で学びたい者など、多岐にわたる。(下の写真は3年3組生徒の授業風景)



「今、目の前にいる生徒にとっての『生きて働く質の高い学力』とは何か」。海洋科学科の生徒を担当することが決まった4月の段階で、稿者は逡巡した。現在の社会状況だけでなく、今後の社会の方向性を見据えた上で、さらには生徒の進路希望を踏まえた上で、借り物ではない目標を稿者自身が自分の言葉で設定し、生徒と共有したいと考えたからだ。

それでは、このような生徒たちに対して授業を通して培うべき「生きて働く質の高い学力」とは何か。さらには、そのような学力を培うためには、どのような単元を組織することが有効に働くか。本稿ではこの2点について論じていく。

2. 言語行動主体の育成と「見方・考え方」

たとえば田近(1975)は言語行動を「認識」そのものだと捉えた上で、国語科教育の目的の一つを「言語を媒介とする認識力・伝達力」に基づく「言語行動主体」の育成に置き、以下のように述べた。

言語を使うということを、状況的存在である人間の主体的行動として捉えねばならない。そしてそれを座標として、言語を媒介とすることによって生まれる様々な意識や認識の働き、あるいは言葉によって可能になる抽象的な想像や遊びの価値の独自性を捉えねばならない。

中略

真に『主体的』とは人間の新しいよみがえりの過程において、厳しく自己批判・自己変革する主体のあり方のことであろう。

この論からは、田近が人間というものを「状況や他者と関わり合いながら絶えず自己を相対化した上で、内面から自己を変革していく主体的存在」として捉えていることがわかる。

田近の論は今から 40 年以上前に出されたものではあるが、「言語行動主体」を育成することの重要性はむしろ当時よりも増していると言えよう。変化の激しい時代の荒波の中で、確かな舵取りをして自分の人生の物語を編むことができる生徒の育成が、今まさに求められている。特に高校卒業後直ちに社会に巣立つ飛び立つ生徒を多く担当する授業者にとって、解決すべき最も重要な課題は、この「言語行動主体の育成」である。

それでは一人ひとりの生徒を「言語行動主体」として導いていくにはどうすれば良いのか。その鍵となるのが「教養」である。2002 年に出された「新しい時代における教養教育の在り方について(答申)」においては、「教養」の定義を

個人が社会とかかわり、経験を積み、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身に付ける、ものの見方、考え方、価値観の総体

とし、その育成を求めている。もちろん、今回対象となる 3 年 3 組の生徒だけでなく、すべての高校生に育むべきものである。ここでは特に、この定義に示された「ものの見方・考え方」という言葉に注目したい。

2016 年 12 月に出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下【答申】という)では、何度も繰り返し「ものの見方・考え方」を育てることの重要性が指摘されている。たとえば国語科における「見方・考え方」については、以下のように述べられている。

自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること

対象と言葉、言葉と言葉の関係を捉え、その関係性を問い直して意味付けることは、田近の述べる「言語を媒介とすることによって生まれる様々な意識や認識の働き」や「言葉によって可能となる抽象的な想像や遊びの価値の独自性」を捉えることに他ならない。国語科の授業を通して一人ひとりの生徒を、教養に裏打ちされた「言語行動主体」へと導くためには、ことばに対する「見方・考え方」を鍛えていくことが求められている。もちろん、今回担当する海洋科学科の生徒にとっても有効な手立てである。

まとめよう。変化の激しいこの時代だからこそ、時代の荒波の中で確かな舵取りをして自分の人生の物語を編んでゆくことを可能とする、「教養に裏打ちされた『言語行動主体』の育成」が求められる。特に国語科においては、ことばに対する「見方・考え方」を鍛えていく単元の開発が鍵となると言えよう。

3. 単元構想のプロセス～単元「短歌を創ろう」～

それでは、ことばに対する「見方・考え方」を育む単元を、どのように構想すれば良いのか。稿者が2016年11月に若狭高校海洋科学科3年3組（探究コース）を対象として行った単元「短歌をつくろう」に基づき具体的に考えてみよう。

あらかじめ断っておくが、短歌の創作を中心課題とした本単元は、教員生活26年目に於いて初めて試みたものであり、稿者としてはかなり実験的かつ挑戦的に構想した。

単元の途中では、生徒が行うことばの吟味に、どの程度まで介入して指導すべきか、逡巡し苦しんだ。また、どうしても短歌が創作できないことに苦しむ生徒に対して、有効な手立てをとることも難しかった。そのような単元であることをお含み頂きたい。

3. 1 単元「短歌をつくろう」の目標

設定した単元の目標は以下の通りである。

- 1 経験を問い直し、ことばとことば、ことばと対象をつなぐ。
- 2 つないだ関係性を、対話を通して問い直し、吟味して意味付ける。
- 3 自らのものの見方、感じ方、考え方を見つめ直したり、深めたりする。

本単元において生徒は、見たこと、聞いたこと、感じたこと、考えたことを、三十一音の短歌で表現する。定型に収めるために、ことばの選び方や表現の仕方を工夫するなかで、自身の体験した出来事や経験のもつ意味を問い直し、言葉と言葉、言葉と対象をつなぐ。さらには、そのつないだ関係性を、クラスメイトや教師、短歌に関わるテキスト等との対話を通して問い直し、吟味して意味付ける。

これらの過程は、自身の世界認識を明らかにしていくことでもある。なぜなら、吟味され、選ばれたことばは、生徒自身の個性や世界認識の表れ以外のなにものでもないからだ。

短歌の創作を通して自身の作品はもちろん、自らのものの見方、感じ方、考え方を見つめ直したり深めたりすることは「教養に裏打ちされた『言語行動主体』の育成」に大きく寄与すると考え、このように設定した。

3. 2 教材の選定

単元目標が定まっただけで、ことばに対する「見方・考え方」が育つ訳ではない。それが自然と育まれるような教材や学習課題、学習活動等を設定する必要がある。稿者は、特に教材の選定に最も多くの時間を費やす。国語科の場合、良い教材を選定することが、学力育成に関する重要な鍵だという実感があるからだ。

「冴えない教材」の場合、どんなに学習活動や発問を工夫しても、良い学習にはなり得ない。逆に「力のある教材」と呼ばれる著作の多くは、工夫すればするほど生徒の頭を活性化させ、深い自己認識・世界認識へと導くことを可能にする。

本単元「短歌をつくろう」では、まず、小浜市出身の歌人である山川登美子に関わる資料を探索した。与謝野晶子と鉄幹を争ったことで有名な登美子の実家は、本校のすぐそばにある。

時代は異なるものの、同じ地域に住み、同じ風景を見つめて、どのような短歌を詠んだのかを生徒が知ることは、学習に対する主体性を高め、生徒自身の創作に生きるのではないかと考え、右に示すような資料を、本校の図書学習センター、県立図書館から借りた。

さらには「最近の若手の歌人の作品はどのような短歌を詠むのか」「どのようにプロは短歌を創るのか」などの観点から選び出した約20冊の書籍から、目標の達成に資する箇所を拾い集め、教材化した。



山川登美子に関連する書籍

3. 3 学習課題の構想

もちろん良い教材を選んだだけで、ことばに対する「見方・考え方」が育つ訳でもない。課題解決型の学習が推奨されることも最近増えてきたが、設定された「課題」が探究に値する「問い」として成立していない場合、ほとんど学習の意味をなさない。稿者が学習課題を設定する際には、特にその課題の真正性を重視している。

ウィギンズ&マクタイ(2005)は、「大人が仕事場、市民生活、私生活の場で『試されている』その文脈を模写したりシミュレートしたりする課題」を真正(authentic)の課題と位置づけた。本単元においても真正の課題を設定することにより、生徒の主体性も高まり、ことばに対する「見方・考え方」も育まれていくことが期待できる。

そこで今回は「良い短歌とはどのようなものか」という大きな課題を設定した上で、単元の節目ごとに小課題を設定した。たとえば山川登美子記念館との連携企画を立ち上げ、「山川登美子記念館に掲示するのにふさわしい、自分らしい短歌とは」という小課題を単元の冒頭に設定した。生徒には、登美子記念館の企画展として実際に展示していただけることを伝え、ことばの吟味を徹底させた。チラシも作成・配布され、複数の新聞にも取りあげられたことにより、生徒の主体性はいやがおうにも高まり、良い短歌が創られた。

また、「各コンクールのテーマにふさわしい短歌とは」という小課題を単元の中盤に設定し、前田純孝短歌コンクール、吉井勇短歌コンクール等、多くのコンクールに応募した。

単元の最終場面では、「地域の短歌同人に披露する、自分らしい短歌とは」という小課題を設定した。生徒は、プロの方に披露する自作を何度も吟味することを通して、自分自身のことばに対するものの見方、感じ方、考え方を見つめ直したり、深めたりすることができた。

小浜市千種1丁目の山川登美子記念館と若狭高校の連携企画展「明治と平成のティーンエイジャー」が16日、同記念館で始まった。12月19日まで（火曜日休館）。観覧料は大人300円、高校・大学生200円、中学生以下無料。

明治時代を果敢に生きた登美子と、現代の高校生を対比しようという企画。大阪の梅花女学校に進学して詠んだ登美子の短歌と、若狭高校海洋科学科3年生26人の短歌を併せて展示。時代背景などを浮き彫りにしている。

小浜出身の歌人に目を向けてほしいと、記念館側が高校に提案。登美子が若いころに投稿した文芸雑誌「文庫」など計50点余りの展示は、高校生の意見も参考に並べた。

記念館によると、薄命の人生ながら自らの思いを短歌で表現、発信する登美子の強い女性

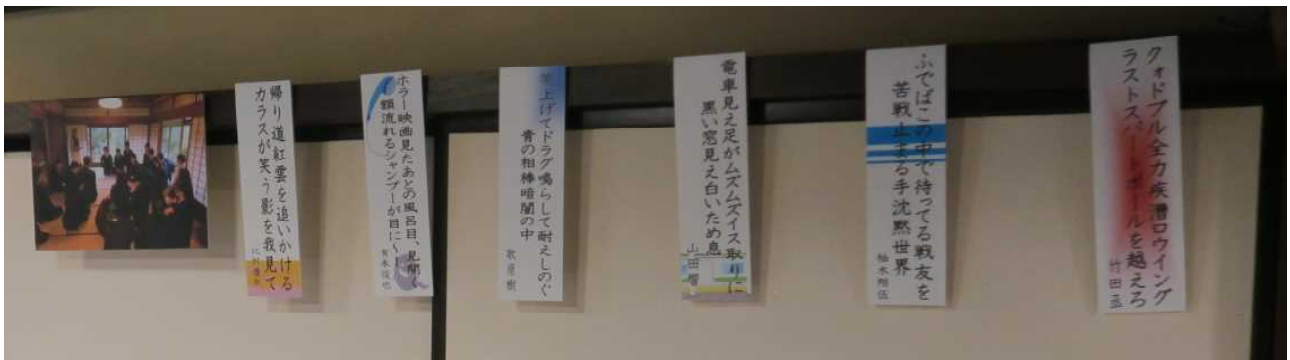
短歌でコラボ 企画展始まる
小浜の山川登美子記念館と若狭高

高校生の短歌が現代の文芸誌などを示した会場。小浜市の山川登美子記念館で

像を「かつこいい」とする高校生の声が届いているという。今月19日午後1時からは記念館で、男女4人の生徒による「ギャラリートーク」（無料）が開かれ、創作した短歌や登美子への思いを生徒自身が披露する。（池上浩幸）

山川登美子記念館企画展チラシ

2016 11月17日 日刊県民福井 による紹介記事



山川登美子記念館にて展示頂いた生徒の短歌

3. 4 学習活動の構想

いくら良質の課題を設定したとしても、学習目標を生徒と共有せず、既存知識を喚起したり、議論を導くような効果的な質問も教師から投げかけないまま、ただ生徒に自由に探究させるだけの「活動主義」では、資質や能力は育たない。

そこで重要になるのが、学習活動の適切な設定である。生徒が主体的に、様々な知識・スキルを文脈に応じて試行錯誤しながら使う機会を十分に保証することが求められる。課題解決に向けてどのように活動を組織するのか、教師の手腕が試されているとも言える。

最も留意すべきなのが、生徒の主体性を高めるための工夫を施すことである。本単元の第二時には、生徒を実際に山川登美子記念館に引率した。小浜市文化課の矢野主事から、次頁に示す写真の通り、登美子の作品やその生涯をご説明いただいた後に「この記念館に掲示する短歌を創って欲しい」という依頼を直接話していただいた。

登美子の生涯についての説明を聞く



矢野主事から企画の依頼を受ける



次に重要になるのが、知識や技能を身につけながら思考を深めることが可能となるよう、活動を組織することだ。本單元では、第一時に「『飛び出すな車は急に止まれない』の後に続く下の句を詠む」という活動を設定した。栗木(2010)に紹介された事例であるが、既知の標語の下の句を考えさせることを通して、短歌を詠むことへの抵抗感を払拭することを狙った活動である。

どのような短歌が良いのか、どのような技を使うと良くなるのか、といった創作に関わる知識や技能は、短歌を創りながら考え身につけていく性質のものである。知識や技能の習得と思考のプロセスを分断しないように活動を組織することが求められる。まずは、作歌に対する心理的障壁を取り除き、主体的に取り組むことができるようなしかけを行った。

第二時以降は、知識の構造化と、ことばに対する深い吟味とが一体的に図れることを狙って学習を組織した。稿者が作成した俵万智・穂村弘・東直子などが記した複数の作歌に関するテキストを平行して読み進めた上で、それらに書かれた技法のうち自身の創ろうとする歌の題材や主題に合ったものを選び取るなどして、生徒にことばを吟味していくことを促した。

今回特に意識したのは、生徒が単元の目標を意識せざるを得ない活動を繰り返し組織したことである。もちろん、単元の冒頭には目標を提示し、生徒と授業者が同じ方向を向いて学習が展開できるようにしている。とはいえ、活動を進めていく中でその目標を見失うこともあるため、単元の途中で目標を繰り返し意識させることは有意義だと考えるからだ。

たとえば本單元では、第三時に佐々木幸綱(1988)『短歌に親しむ』を教材として扱った。佐々木は、短歌にあるきまりは「五七五七七」という形式だけであり、短歌らしい短歌をつくらうと思わずに自分らしい個性的な短歌をつくらうと試みるべきだ、とした上で、以下のように述べている。

文芸における個性とは、ただありのままの自分という意味だけではありません。もっと積極的に、自分の中に未知の自分を発見し、自分の力で自分をつくり上げてゆく、そういう性質のものなのです。短歌をどうつくるかの問題は、つまり、自分の中の個性をどう見つけ、自分の中にどう新たなる個性をつくり上げてゆくか、そういう問題なのです。

なぜ短歌を詠むという学習を行うのか。ここにはその答えが書かれている。文芸における個性とは、「ただありのままの自分」という意味だけではない。自身の経験を問い直し、

ことばとことば、ことばと対象をつなぐ中で育まれていくものだ。何を題材として読むか、どの対象をことばにして選び取り、意味づけるかを考えるプロセスにおいて、生徒の「ものの見方・考え方」が培われていく。まさに、短歌創作という活動は、本単元の目標の達成に資するものである。様々な短歌創作・鑑賞に関するテキストを読解させる活動を通して、再度単元の目標を生徒に理解させていくことを意識した。

また、本単元では作歌の過程をふりかえらせる活動を何度も組み込んでいる。目標に照らし合わせて自身の作歌の過程を振り返ることを通して、次の学習において自身の達成すべき目標も明確になる。

ふりかえりの活動では右の写真に示すようなグループの形態をとった。お互いの考えを知ることを通して、自身の「ものの見方・考え方」を理解できるよう促すことを狙いとしている。



このように、様々な内容や形態を複雑に組み合わせながら学習活動を組織したのには理由がある。

知識や技能のように直接的に教えたりドリルを重ねたりすることによって育むことが可能な資質・能力もあるが、ことばに対

する「見方・考え方」を育てるためには、石井(2015)が指摘するとおり、学習者の実力が試される、思考やコミュニケーションする必然性のある文脈に基づく学習活動が不可欠であるからだ。本単元における学習活動の構想に当たっては、「見方・考え方」が生徒一人ひとりの中に構造化されることを狙って、上記で述べた様々な仕掛けを組織化した。単元計画の詳細は「参考資料1 本単元の指導と評価の計画」に示す。

3. 5 評価の構想

「真正の課題」による学習には、「真正の評価(authentic assessment)」を行うことがふさわしい。八田(2016)によれば「真正の評価」とは、作為的かつ低次の問題を子どもに課す「標準テスト」を批判して登場した評価論であり、豊かな学習が育む質の高い学力を映し出す評価を意味する。また、「真正の評価」の代表的な評価方法の一つに「パフォーマンス評価」があるが、「パフォーマンス評価」とは、子どもたちに思考を表現させたり知識が生きて働いている様相を把握したりするのに適切な評価課題を設定し、それに対する学習過程や学習成果物を評価することを意味する。

ここで急いで断っておくが、渡邊(2016)でも述べたとおり、「評価」とはテスト等で生徒を「ネブミ」・序列化することではない。評価の目的は「『教師の指導』と『子どもたちの学習活動』の改善」にある。にもかかわらず、活動の「ネブミ」を目的とした「指導と評価の一体化」が現在各所で進んでいる。

多くの高等学校では、「アクティブ・ラーニング」「指導と評価の一体化」というスローガンのもとに、生徒にアクティブな学習活動をさせ、それを教師が評価基準表（ルーブリック）を用いて「ネブミ」を行うことが横行している。（特にSSH・SGHに選定されている学校に多い）石井(2017)は、パフォーマンス評価の主旨が十分に現場に浸透していない状況について、以下のように批判している。

ルーブリックという基準表づくりとその当てはめによる学習状況の点検として理解される傾向も生じており、「ルーブリック評価」ということばすら生まれている。

中略

ルーブリックは、教師の専門的な解釈の枠組みや判断の物差し(鑑識眼)を可視化するものであり、その妥当性を同僚とともに事例に則して検討し直す機会を持つことで、教師の鑑識眼を鍛えることにつなげていくことが重要なのである。

本来の評価の目的に立ち返り、授業改善に資する評価を構想する必要がある。そこで、本単元ではあえてルーブリックを作成せず、以下の評価規準を設定し、生徒の学習状況を形成的かつ総括的に評価した。適切に観点を設定し、教師の鑑識眼を働かせることができれば、高次のレベルの思考も評価することができると考えたからだ。

<ul style="list-style-type: none"> ・何を理解しているか、何ができるか 	<ul style="list-style-type: none"> ・題材やことばの選択、構想、構成、推敲 に関わる作歌上の知識を理解している。
<ul style="list-style-type: none"> ・理解していること、できることを、どう使うか 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌の題材を選び、構想を立てた上で、構 想を形象化するためにどのようなことばを用いると良いか、その構成も含めて吟味している。（現行学習指導要領 現代文B 内容のオに準拠） ・作歌上の知識をふまえて実際に作歌することを通して、自身のものの見方・感じ方・考え方を問い直している。
<ul style="list-style-type: none"> ・どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか 	<ul style="list-style-type: none"> ・作歌にこだわらず、広い意味で文学の創作活動に積極的に関わり続け、他者とももの見方・感じ方・考え方を対話し、問い直す機会を作り出し続ける。

本単元における評価の規準は、現行学習指導要領上で示されている三観点ではなく、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」(2016)にて育成すべき資質・能力として示された「三つの柱」に基づき設定した。（ただし現行学習指導要領上の指導内容には準拠した）

このうち、特に重視するのは「理解していること・できることをどう使うか」という「思考力・判断力・表現力等」の観点である。その中でも「ことばを吟味する」側面を生徒のノート記述などを通して、重点的に評価するよう計画した。

3. 6 多様な方から評価を受ける機会を充実する

本単元の評価計画で特に意識したのは、多様な方から評価を受ける機会を充実させることである。授業者である稿者が評価を独占するのではなく、生徒に評価規準に基づく自己評価や相互評価を促したり、学校外の様々な方に評価を開いたりすることを意識した。

石井(2017)はテスト以外の「見せ場」を教室に創り出すことの重要性を、以下のように指摘している。

教師やクラスメート以外の聴衆(他学年の子ども、保護者、地域住民、専門家など)の前で学習の成果を披露し、学校外のプロの基準でフィードバックを得る機会が設定されることで、学習者の責任感と本気の追求が引き出されるとともに、そこでプロの基準(その分野の活動の良さの規準)を学ぶことで、教師から価値付けられなくても、学習者が自分自身で自律的に学習を進めていくことや、教師の想定や目標の枠を超えた「学び超え」も可能になるだろう。

本單元においては、学校外の方から直接評価を得る機会を三度設けた。最初の機会となったのは、山川登美子記念館の協力を得て行った企画イベント「明治と平成のティーンエイジャー」での展示である。来館者の短歌愛好者からコメントを書いてもらったり、投票による評価を受けたりすることは、生徒にとって大きな励みとなった。有志の生徒が来館者へのギャラリートークも行うことにより、直接各自の短歌の評価も得られた。



来館者へのギャラリートークを行う生徒



二度目の機会として第十時には「自身の歌と作歌のプロセスを紹介し、評価を受ける」という活動場面を設定した。当日は公開研究授業日であったことから、神戸大学、福井大学の研究者（6名）、県外の高校・教育関係者（8名）、本県指導主事（4名）、県内中学校教員（4名）、県内高校教員（6名）、福井大学教職大学院生（6名）から参観の申し込みを頂いた上に、小浜市の矢野主事もご来訪くださった。校内教員や申し込み外の方も含めると50名を超える方が参観し、生徒の詠んだ短歌を評価した。

生徒は自身の詠んだ短歌を紹介した後に「私はなぜこのような題材を選び、このようなことばを選んだのか」「私は、何を伝えたいのか。」を中心にスピーチした。生徒一人につき3～4人の参観者がついてくださり、直接口頭で評価くださったことになる。

参観の方々は、いくつかの質問を挟みながら、上手く生徒の思いや考えを引き出してくださった。それぞれの生徒が自身の「ものの見方・考え方」が明らかになった、とこの活動をふりかえっていたことから、この構想が有効であったことがわかる。



11月17日 第10時 公開研究授業



他校の先生方から評価を受ける

三度目の外部の機会として設定したのは、第十五時である。ここでは、小浜市の歌人協会から7名の短歌同人をお招きし、生徒が創った短歌の合評会を開催した。同人の方々には、生徒4名のグループに一人ずつお入り頂き、生徒が互いの短歌の良い点や修正すべき点などについて自由に意見を述べられるよう、進行役をお願いした。もちろん、同人の方からも生徒の短歌を批評頂くことを通して、ことばに対する「見方・考え方」も鍛えて頂いた。長年短歌創作に携わってきた短歌同人の方々からの専門的で深い示唆は、生徒の学習を大きく促進させた。



第15時 1月12日 短歌同人をお招きしての合評会



生徒の多様で質の高い学びを引き出すためには、学校が社会とのつながりの中で教育を展開することが有効に働く。本単元のように、学校外の様々な他者から評価を受けることは、生徒自身が学びの意義を自覚する重要な機会となる。特に本校は総合的な学習の時間や学校行事を通して地域の方々にお世話になることが大変多い。地域に支えられた学校であるという利点を活かし、今後も社会に開かれたカリキュラムとなるよう、工夫していきたい。

3. 7 教師による評価の実際

本単元では、生徒が短歌を創作する過程におけるそれぞれの場面において評価を行った。どのように、どれくらい、ことばの吟味がなされているか、創作された短歌だけではなく作歌の過程全体を評価した。

短歌の創作は通常、以下のような過程を経ることが多い。

作歌の過程（なお、この過程は段階ではない。行ったり来たりするものである）

- 1 題材の選択（経験を想起したり新たに取材したりして、題材を選ぶ）
- 2 構想(題材に基づき、伝えたい内容を明確にする)
- 3 ことばの選択(構想を形象化するために、どんなことばを用いるかを選択する)
- 4 構成（どの順序で、どんな表記で詠むかを構成する）
- 5 推敲(自己評価や他者からの評価に基づき改善する)
- 6 発見（世界と自己に対する新たな発見）

それぞれの生徒が、自身のこだわるさまざまな観点に基づきことばの吟味を行うことが想定されるが、たとえば歌人の穂村弘は、短歌が人を感動させるための要素として「共感(シンパシー)と驚異(ワンダー)」を挙げている。この観点を用いて評価するならば、共感を損なわずに驚きを起こさせるために、

- ・ どんなことばを選択しているか
- ・ 自身の選んだことばが体験や感情を凝縮する形でつながっているか
- ・ 意味の重なりや論理の飛躍なくことば同士がつながっているか
- ・ 結果として、読み手に「共感と驚異」を呼び起こすことができるか

などの吟味を、それぞれの生徒がどのように行っているかについて、教師が評価した。

もちろん、「共感と驚異」以外にも、吟味の観点としては「具体的に細部が描かれているか」「心情と情景を一致させているか」「動かないことばを用いているか」「『もの』と『われ』の関係がはっきりしているか」「情景と発見があるか」

「要素がぶつかり合っていないか」「リズムとイメージの響き合いがあるか」などさまざまなものがある。生徒それぞれが自身の設定した観点に基づき吟味するプロセスを、主にノートの記述や行動の観察、生徒との個別のやりとりなどを通して、毎時間ごとに評価した。



指を折って音数を確認しながら作歌する生徒

さらに、作歌のプロセス全体を生徒自身がふりかえり、再構成することを通して、自ら

のものの見方、感じ方、考え方を見つめ直したり、深めたりしているかも評価した。

ただし、それぞれの生徒の認識の程度には、もともとかなり差があることをふまえ、統一した評価規準に基づくのではなく、個人個人が以前と比べてどう変化したのかを評価した。いわゆる個人内評価の充実を図ったと言えよう。

3. 8 生徒による自己評価

本単元の学習をとおして、それぞれの生徒にはどのような自己認識が育ったのか、自己評価として生徒が書いた、ふりかえりの記述から考察しよう。

「短歌を通して明らかになった、自分自身の個性・考え方は何か。」という問いに対し、生徒Aは以下のように記述する。

私は、授業で短歌を学習することで、自分自身の個性を改めて知ることができました。自分の好きな食べ物や自分の趣味、自分の家族や友達、心に残った思い出などを短歌で表すことで、自分という存在を見つめ直すことができました。

竿上げてドラグならして耐えしのぐ青の相棒暗闇の中

これは私が今までの授業で創った短歌の中で、最も良い作品だと考える短歌です。もちろん、何度も推敲を重ねることによって、この形になったわけですが、一番最初の形を見返すと、自分の個性があふれ出ている短歌だなーと思いました。自分てこんなに釣りが好きなんだなーとか、あのときは本当にショックだったなーと感じ、思わず笑ってしまいました。

生徒A

生徒Aの記述からは、この生徒自身が、これまで創作した短歌の特徴をふまえ、自身の価値観を再確認したことが読み取れる。生徒Bの記述も見てみよう。

短歌を通して明らかになった自分自身の個性は、自分のふるさとに対しての思い入れが強いことだ。私の詠んだ

いつの日か祖母が言ってた言い伝えみかん投げると美味しくなるで

という短歌では、言葉選びの中でどうすればふるさとのどこか懐かしく、優しい短歌になるのか考えた。方言を入れてみたり、迷信について語ってみたり、その地にすむ人しか詠めない短歌を詠むことができ、さらに自分のふるさがより一層大切に思えた。

生徒B

一つひとつのことば選びの過程をふりかえることを通して、自分自身の価値観を理解していることがわかる記述である。

どちらの生徒も、作歌上の知識をふまえて作歌に向けて歌の題材を選び、構想を立てた上で、構想を形象化するためにどのようなことばを用いると良いか、その構成も含めて吟味していることが分かる。もの見方、考え方、価値観の総体としての教養に裏打ちされた「言語行動主体」として育ちつつあると言えよう。

変化の激しい時代において育むべき「生きて働く質の高い学力」は、単純に知識を活用する力には留まらない。今回の例で言えば、生徒たちは、作歌に関する知識の実行に際しては相当に吟味し、何度も実行することを試みながら、より良い使用についての理解を深めた上で、創造的に知識を用いていた。さらには、自身のものの見方や感じ方・考え方の問い直しも同時に行われていた。

たとえば「あかいろの口紅ひとぬりクロエふり鏡にうつるひよこのレディ」という短歌を詠んだ生徒Cは、稿者の設定した5つの問いに基づき、以下のように短歌創作のプロセスをふりかえっている。

① なぜ、その題材を選んだのか

真っ赤な口紅や香水などお洒落に関心のある、少し背伸びをした女子高生の視点で詠みたいと考え、リアルタイムな今しか詠めないものを選んだ。

② なぜ、そのような言葉を選んだのか

聴き手がイメージしやすい言葉で、かつストレートに言葉を伝えてしまわないように細部の部分をこだわり、さらに驚きを取り入れようと工夫をした。

③ 自作の歌の変遷過程

初めは「似合う女になろう」という自身のストレートな気持ちを表現したが、幼さと憧れのギャップを表現し、より奥深さが出るよう工夫をした。

④ 自作に対する他者からの評価

憧れの胸の高鳴りとまだ高校生という未熟さを「ひよこ」が表現していて、色の部分をひらがなになっているところがわかりやすいと評価された。

⑤ 短歌を詠むことについて感じ・考えたこと

自分の気持ちを表現するのに、ぴったり当てはまる言葉を選べるのは自分だけだから、より相手にイメージしやすい言葉を選ぶのが大切だと考えた。 生徒C

続いて、「夏休み常神沖へ船を出すそこではまるで父が先生」と詠んだ生徒Dのふりかえりを見てみよう。

① なぜ、その題材を選んだのか

このような題材にしたのは、夏休みに父の漁の手伝いをほぼ毎日していたのは自分だけだと思い、自分にしか経験できないことを短歌にしたかったから。

② なぜ、そのような言葉を選んだのか

上の句はシンプルに夏休み中に手伝いをしていたことを表した。下の句では父がいつもと違って様々なことを教えてくれたので、先生にしてみた。

③ 自作の歌の変遷過程

この短歌ができるまでは、下の句は「将来のため日々修行」と書いていたが、自分が見た者や感じたことを表そうと思って、「そこではまるで父が先生」になった。

④ 自作に対する他者からの評価

発表した後聴いてくれた先生の方々には、下の句の表現を評価して頂き、自分が伝えなかった、自分だけにしかない経験だと言うことが伝わって良かった。

⑤ 短歌を詠むことについて感じ・考えたこと

短歌を詠むと言うことは、授業を通してとても難しいことだと思った。しかし、発表して評価を頂いたとき、短歌の楽しさがわかったような気がした。 生徒D

もう一人、「大好きなキミの笑顔をひきだしてレンズにうつる幸せの音」と詠んだ生徒Eはどうだろうか。

① なぜ、その題材を選んだのか

私は写真を撮ることが好きで、今年の夏に一眼レフを買ってもらい、いろいろ写真を撮っていた中で人を撮ることが一番楽しかったから。

② なぜ、そのような言葉を選んだのか

私は、人を撮ることが大好きだと言うことをアピールしたいと思い、「大好き」や「幸せ」などの単語を使用した。

③ 自作の歌の変遷過程

最初は、「キミ」ではなく「友」を使用していたが、友以外の家族や大切な人たちも撮りたいと思い、「のぞく」から「うつる」は響きが良いと思い、変えた。

④ 自作に対する他者からの評価

情景がわかりやすい工夫や、耳で楽しむだけでなく、漢字やひらがなの使い分けをしたので、目でも楽しめると、多くの良い評価を頂いた。

⑤ 短歌を詠むことについて感じ・考えたこと

私は、分かりやすい短歌をつくってしまうのでプロみたいな考える短歌を作りたいと思った。もっと単語の難しい言い方などを勉強したいと思った。 生徒E

本単元に取り組んだ多くの生徒が、上記のような記述を残している。どの生徒も、作歌に際しては、単元を通して培った知識に基づき、相当に吟味して言葉を用いていることがわかる。さらには、言葉の吟味を通して、自身のものの見方や感じ方・考え方の問い直しを行っていた。このような姿こそが言語行動主体の育成につながる学力を獲得した証左だと言えないだろうか。

4 成果と課題

本研究の成果は、変化の激しい時代において育むべき学力を「生きて働く質の高い学力」と措定した上で、ものの見方、考え方、価値観の総体としての教養に裏打ちされた「言語行動主体」の育成に向けた単元のあり方を具体的に示したことである。

本単元では、単元の目標を

- 1 経験を問い直し、ことばとことば、ことばと対象をつなぐ。
- 2 つないだ関係性を、対話を通して問い直し、吟味して意味付ける。
- 3 自らのものの見方、感じ方、考え方を見つめ直したり、深めたりする。

と設定し、生徒の主体性を育み、目標の達成に資する教材に基づき学習課題を構想した。

学習課題は、真正の課題となるよう「良い短歌とはどのようなものか」という大きな課題を設定した上で、「山川登美子記念館に掲示するのに相応しい、自分らしい短歌とは」「各コンクールのテーマに相応しい短歌とは」「地域の短歌同人に披露する、自分らしい短歌とは」の3つの小課題に基づき学習活動を組織した。特に、生徒が主体的に、単元の目標を意識した上で、様々な知識・スキルを文脈に応じて試行錯誤しながら使う機会を十分に保証できるよう、気を配って活動を組織した。

本単元の最も大きな特徴は評価の構想であろう。まず、本単元は「真正の評価」論に基づき行っている。評価規準における「理解していること・できることをどう使うか」という「思考力・判断力・表現力等」の観点に重点を置いた上で、特に「ことばを吟味する」側面を生徒のノート記述などを通して、重点的に評価するよう計画した。

学校外の方から直接評価を得る機会を三度設けたことは、生徒の学習を促進する上で、特に有効に機能した。地域住民、専門家等の前で学習の成果を披露し、多様な基準で評価を受ける機会が設定されることで、生徒の主体性が育まれると同時に、ことばに対する「ものの見方・考え方」が培われたことは、生徒の自己評価記述から明らかである。「社会に開かれた評価」の有効性が示されたと言えよう。

今後の課題は2点ある。1点目は総括的評価のあり方の検討だ。松下(2017)が示すとおり、国語単元学習においては、単元の構成自体が評価的機能を持っている。本単元においても、学習活動そのものが形成的評価の機能を担っている。とはいえ、総括的評価が不要というわけではない。どのような総括的評価が有効に働くか、そのあり方を検討していかなければならない。

2点目は、評価基準の精緻化だ。本単元では評価基準表（ループリック）を作成するのではなく、評価規準を作成し、その観点に基づき評価を行った。教師の鑑識眼による評価も有効ではあるが、その鑑識眼を評価基準表の形で明示化し、生徒と共有することは学習を促進させる。言語化しづらい部分もあるが、できるだけ明示化できるよう検討していきたい。

「コンテンツベースからコンピテンスベースへ」のかけ声の下、教科内容よりも教科横断的な汎用的スキルを重視する動きも見られる。しかし言語主体を裏打ちする「見方・考え方」は、各教科内容に対する深い学びの下でしか培われない。「変化の激しい時代に対応できる汎用的な思考スキルの教授への切り替え」と言った言説に惑わされず、教科内容に関わる「見方・考え方」に裏打ちされた言語行動主体の育成を今後も目指していきたい。



11月17日 公開授業時の学習活動

参考文献

リンダ・グラットン(2011) 『The Shift: The Future of Work is Already Here』 HarperCollins Business 邦訳は『ワーク・シフト ― 孤独と貧困から自由になる働き方の未来図』プレジデント社

石井英真(2015) 『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準ブックレット

渡邊久暢(2016) 「『生きて働く質の高い学力』を培う单元デザインのあり方」福井県立若狭高等学校研究雑誌第46号

田近洵一(1975) 『言語行動主体の形成』新光閣書店

中央教育審議会(2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」

中央教育審議会(2002) 「新しい時代における教養教育の在り方について(答申)」

ウィギンズ&マクタイ(2005) 『Understanding by Design: Expanded Second Edition』 Prentice Hall 邦訳は『理解をもたらすカリキュラム設計』日本標準

栗木京子(2010) 『短歌をつくろう』岩波ジュニア新書

佐々木幸綱(1988) 『短歌に親しむ』NHK出版

八田幸恵(2016) 「アクティブでコミュニカティブな読みの行為を育てる『真正の評価』と『パフォーマンス評価』」教育科学国語教育 2016年2月号 明治図書

石井英真(2017) 「資質・能力を育成する多面的・多角的な評価とは—パフォーマンス評価の基本的な考え方—」教育科学国語教育 2017年3月号 明治図書

松下佳代(2017) 「国語单元学習から学ぶ—ディープ・アクティブラーニングと評価—」教育科学国語教育 2017年1月号 明治図書

なお、本論は福井県高校教育研究会(2017)「国文学」「高次のレベルの思考力を育む単元の構想——現代文B『短歌をつくろう』」を大幅に加筆修正したものである。

参考資料 本単元の指導と評価の計画

時間	各時間の目標	評価規準（評価方法）	学習活動
1	ことばのバランスに配慮した短歌を創る	・固定された上句・下句とのバランスに配慮したことばを選択している。 (創作した短歌の分析)	『短歌をつくろう』（栗木京子）に基づき「飛び出すな車は急に止まれない」などの標語を短歌の上句あるいは下句に見立てて、残りのことばを足す。
2	作歌の意欲を高める	・より良い短歌を創ろうとしている。 (ふりかえり記述の分析)	山川登美子記念館にて、イベントの企画意図の説明を聞いた上で、短歌創作・展示の依頼を直接受け、実際に自身の短歌が展示されるイメージを持つ。
3	自分らしさが出る題材を選択し、具体的に細部まで詠む	・自分らしさを生む題材を選択している。 ・題材に基づき、細部まで詠み込んでいる。 (短歌とふりかえりの分析)	『短歌に親しむ』（佐々木幸綱）に基づき、経験を想起したり新たに取材したりして、自身が詠む題材を選択する。 具体的に細部まで詠み込むことの重要性を理解した上で、個性的な短歌を詠む。
4	ことばの選択、構成を吟味する。	・構想を形象化するために、どんなことばを用いるかを吟味して選択している。 ・どの順序で、どんな表記で詠むかを吟味して構成している (短歌とふりかえりの分析)	『短歌の不思議』（東直子）『短歌カンタービレ』（尾崎左永子）に基づき、短歌の穴埋めを行い、クラスメイトと交流する。ことばの選択の重要性を理解した上で、短歌の構想を練り上げ適切なことばを選択し、構成を吟味する。
5	他者からの評価も踏まえて推敲する	ことばの選択や構成について、他者の評価を踏まえて、自分なりの観点を立てて推敲している。 (短歌とふりかえりの分析)	クラス全員の短歌についての教師からのコメントを参考にしたり、自作の短歌についてクラスメイトからの評価を受けたり、『現代短歌作法』（小高賢）等を参考にしたりしながら推敲する。

6	推敲を重ねる	自身の短歌を吟味する観点に基づき推敲を重ねている。 (短歌とふりかえりの分析)	『初めての短歌』(穂村弘)に基づき短歌の穴埋めや、良歌の選択を行い、自身の短歌を吟味する観点を獲得したうえで、さらに推敲する。
7	推敲を重ねる	他者からのアドバイスをふまえて、推敲を重ねている。 (短歌の分析)	教師やクラスメイトからのアドバイスを受けながら推敲を重ね、登美子記念館に展示する短歌を決定する。
8 ・ 9 ・ 10 ・ 11	自身の世界認識・自己認識を整理する。	・なぜ、その題材を選び、どのような構想に基づき、ことばを選択し、構成した上で、作歌したのかについて、整理している。 ・自身のものの見方 ・考え方・感じ方を問い直している。	・自身が歌の完成に至るまでの題材の選択・構想・ことばの選択・構成のプロセスをふりかえる。 ・自身の歌と作歌のプロセスを参観者に紹介し評価を受ける。 ・自身の世界認識・自己認識を文章化し、クラス短歌集としてまとめる。 ・作成した短歌は「前田純孝賞」学生短歌コンクールのコンクールに応募する。
12 ・ 13 ・ 14	新たな歌を作る	作歌上の知識をふまえて実際に作歌した経験に基づき、自身のものの見方・感じ方・考え方を問い直している。	・題詠等の手法を用い、全員が同じテーマにて歌を詠む。 ・歌会の形式で相互評価した上で、単元全体をふりかえる。
15 ・ 16	自身の世界認識・自己認識を整理する。	・なぜ、その題材を選び、どのような構想に基づき、ことばを選択し、構成した上で、作歌したのかについて、整理している。 ・自身のものの見方 ・考え方・感じ方を問い直している。	・自身が歌の完成に至るまでの題材の選択・構想・ことばの選択・構成のプロセスをふりかえる。 ・自身の歌と作歌のプロセスを短歌同人に紹介し評価を受ける。 ・自身の世界認識・自己認識をノートにまとめる。 ・作成した短歌は「山川登美子記念短歌大会」に応募する。